

エゾマツ

北海道ボランティア・
レンジャー協議会
エゾマツ19号
平成3年12月26日
発行責任者
河村 千束

『きのこ』のあれこれ

副会長 八戸 克美

秋冷の候となり、日一日と山の紅葉も濃く色づくようになりました。会員の皆さんには、お変わりなく元気で活躍のこととご推察いたします。

今年も早いもので、10月も半ばを経過しようとしています。季節がら、「きのこ」について、新聞、雑誌などから拾い読みしたものを2~3紹介します。

10月6日(第1日曜日)朝、当別町青山地区に「きのこ」採りにいってきました。一番川の沢づたいに入ってみましたが、初めての土地柄から一つも発見できず、さらに足を延ばして道民の森に行きましたが、矢張り発見出来ませんでした。今年は天候の不順もあって、全道的に不作のようです。

帰り、沿道の下で何か採っている人達を見掛けたので行ってみましたら、「ツチスギタケ」を採取していました。ご承知かと思いますが(原色北海道のきのこ)を見ますと次のように記述されています。「ツチスギタケ」形態・傘は3~8センチ。丸山形からほぼへん平に開く。表面は、わら色ないし黄土褐色で、顕著なささくれ状態の鱗片を密布し、粘性はない。肉・帯黄色、においとも温和。茎は傘と同色で、繊維状鱗片をかむり、上部のツバは薄く繊維状。発生場所・路傍、草むら。似た仲間には「スギタケ」「スギタケモドキ」等がある。

「香り松茸、味しめじ」といわれる人気の高いしめじの仲間が、人工栽培に成功し、注目を集めていますので紹介します。

世界で初めて「ハタケシメジ」を王子製紙が人工栽培に成功。特許申請したことが、新聞に載っていました。また、宝酒造も同じく「シメジ」の人工栽培に成功したと、発表されています。そして研究者の次ぎの目標は「マツタケ」の人工栽培だと言われています。バイオ技術の発達が、秋の味覚を巡る戦いを一層過熱させているようです。

「ハタケシメジ」は、従来人工栽培が難しく、あまり食卓に上がりませんでした。現在スーパーなどで「しめじ」として売られている「きのこ」は、ヒラタケ属の「ヒラタケ」か、シロタモギダケ属の「ブナシメジ」と言われ、S味の王様Sと言われている「ホンシメジ」の従兄弟のような種類の「きのこ」で栽培は比較的簡単なようですが「ホンシメジ」に比べて歯ざわりがなく、味がやや淡泊です。一方、「ハタケシメジ」は「ホンシメジ」の兄弟に当たるシメジ属の「きのこ」で、味も見た目も「ホンシメジ」によく似ていると言われています。王子製紙では、ブランド名を「都しめじ」と決め、来秋の販売時までにはコスト半減を目指しているそうです。

「ハタケシメジ」については、9月中旬に上川支庁管内当麻町の大沢ダム現場安全パトロールの帰りに地元の人の案内で、近くの町有林内へ「ハタケシメジ」採りに連れて行ってもらいました。林道の路傍で1～2回分位食卓にのる量の「ハタケシメジ」を採りました。

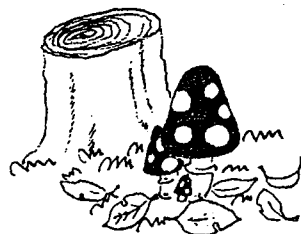
「ハタケシメジ」についても（原色北海道のきのこ）を見ましたら次ぎのように載っていました。傘は、3～12センチ。初め半球形、のち丸山形からほぼへん平に開く。表面は淡灰黒色で、ときにやや粉状。老成すれば淡色となる。肉は白色、ち密、におい弱く味温和、ヒダは白色、密、湾生。茎は類白色。ときには下方著しく太い。発生場所は、草むら、路傍、製材工場跡の畑地など。時期は7月、9～10月。大きさは傘：径10センチ前後。見分け方：樹木のない所にも生える。通常、10本位の株になりその根元は根状となる。一本ずつとり離せる。傘はネズミ色系、ヒダは白色。似た仲間には、「ホンシメジ」「ハタケシメジ」がある。

帰宅後、早速シメジ飯を作り、試食しましたが、味は「香り松茸、味しめじ」の「ホンシメジ」そのものであるように思いました。残りを冷凍庫に保存し、後の楽しみにしています。

とりとめのない事を長々と記しました。野山は日一日と冬の気配が近づいて来ています。

（参考文献：「原色北海道のきのこ」村田 義一

著）



毒きのこ

マツシメジ・カキシメジ



ピンク色

クサウラベニタケ

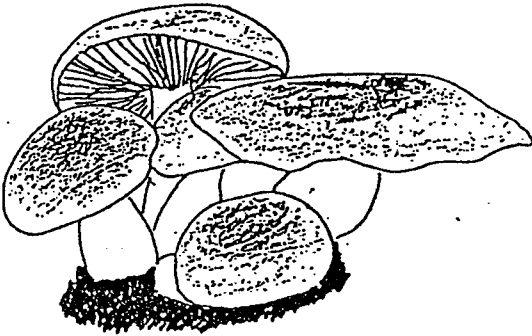


褐色のシミ

マツシメジ (毒)、カキシメジ (毒) はヒダに褐色のシミができる

クサウラベニタケ (毒) のヒダはピンク色である

食用きのこ



ホシシメジ



ハタケシメジ

姿見ノ池

北海道林務部林産振興課

川西正則

9月下旬の連休を利用して旭岳温泉・姿見ノ池へ行った。秋の旭岳山麓は実に二十数年ぶりである。

いつものことながら、我が家の行楽行動は計画性に乏しいようで、今回も前夜急に決めたものであり、事前の情報は天気予報を見た程度で、肝心の紅葉については行ってみでの楽しみというわけである。

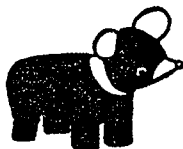
低い雲間から時折、旭岳の中腹が見える小雨模様の山中、駐車場は当然のことながら公共（無料）から埋まり、10時前にはロープウェイ会社の有料も満車に近くなっていた。ロープウェイは1時間以上の待ち、連休の混みようである。かって何度も歩き、時にはひぐまの足跡を見た天人ガ原や盤ノ沢の登りを思い出しながらゴンドラに乗る。

雲は依然として低く流れ、視界は遠方を望めないものの、1000mを越える山岳の天然林はエゾマツの緑と多様な彩りの広葉樹が混交し、紅葉最盛にはもう一息の感じであるがほどほどの眺めである。ゴンドラがスライド的に標高を増すと山肌の色彩も次第に単調に変わり、終点に近づに従ってハイマツとナナカマドの占有が目立ち、低く風雪に耐えて這うように斜傾している。

姿見ノ池周辺の歩道には、色付いたチングルマやコケモモ、黒く小さい実を付けたガンコウランがそれぞれの領域（適地）を住み分けるように群生し、また一部は混生して冬支度をしている感じである。

旭岳山頂は雲海の中で、その美しい姿を池に写してくれず、この日は姿見ノ池に非ず雲見ノ池となっていた。天候は徐々に悪化しており、短い散策を楽しんだあと雲の下降に追われるように山麓の温泉に向かった。

下りのゴンドラでは、紅葉の主体をなす樹木について、少ない知識を最大限家族に披露し少しは点数を稼いだつもりである。これは野幌森林公園をフィールドにボランティア・レンジャーの皆さんに負うところが大きく、あらためて感謝申し上げますとともに、今後の活動を期待するものであります。



（前北海道野幌森林公園事務所）

自然環境部をよろしく

北海道環境科学研究センター自然環境部長 村野紀雄

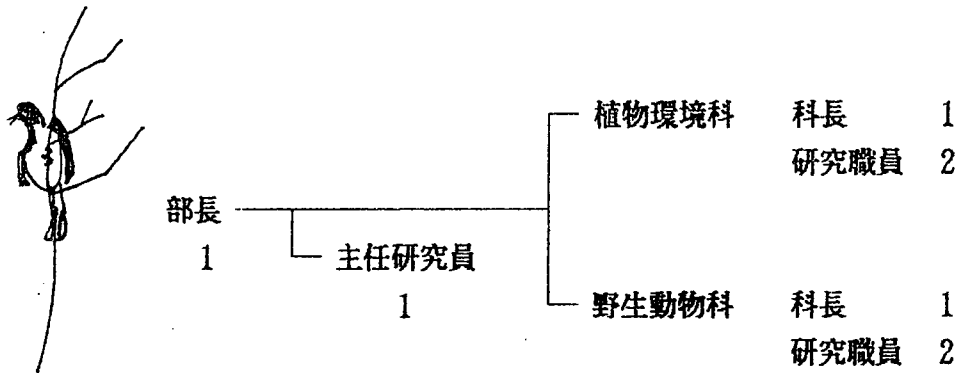
本年5月23日に北海道環境科学研究センターが北海道公害防止研究所を改組、改名して設立されました。

これにともない、北海道の自然環境の保全を目的とする調査研究部門として自然環境部が誕生し、新部の基礎づくりと調査研究の準備と一部実施に向けて歩みだしております。

自然環境部は野生動物、植物の生態や生態系のメカニズムの研究と、これらをふまえた野生動物植物の適正な保護管理のための調査研究を担うこととなります。

自然環境の保全を前面に掲げた研究組織としては国や自治体の中では初めてということもあり、寄せられる研究課題は多大ですが、皆様の御指導、御協力をいただきながら、着実に成果をあげてゆきたいと考えております。御支援いただけますようどうぞよろしくお願いいたします。

なお、現在の部の構成及び各科の調査研究の内容は次の通りです。



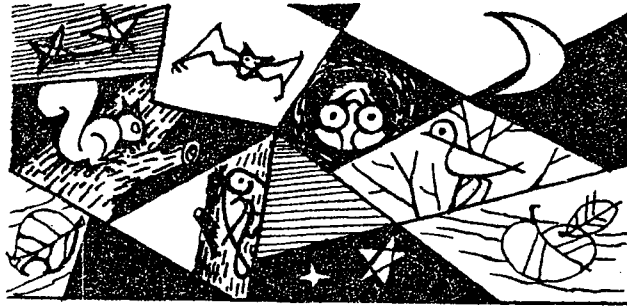
植物環境科

1. 植物群落や特定植物の保全対策の基礎となる植物の生態や分布に関する調査研究。
2. 道立自然公園その他すぐれた自然地域の現況と保全に関する調査研究。
3. 生態系の保全をはかるための植物と動物との相互関係についての調査研究。

野生動物科

1. 野生動物保護管理のための生息環境や分布、生態、個体数等に関する調査研究。
2. 希少種の保全に関する基礎的な研究。
3. 有害鳥獣による被害実態及び防除に関する調査研究。

また、研修会などで部員がお世話になる機会もあると思います。どうぞよろしくお願いいたします。



自己紹介

士別市

野呂一夫

自然が大好きで、自然の中にいることが嬉しくて、道北の野山や大雪の山々を中心に歩き続けております。

ボラ・レンの研修会のあることは知っておりましたが、時間的なこと、距離的なことから仲々参加できませんでした。しかし今回、丸瀬布の研修会に参加させて頂きました。勉強になりました。

今後は、ボラ・レンの会員として一層の自己研鑽に努めると共に、奉仕の活動を続けて参りたいと思います。

士別市中士別町在住、野呂一夫、昭和10年10月25日生れ、男、職業教員。よろしくお願ひ致します。

自己紹介

恵庭市 小林英世

第9回の真狩村でのボランティア・レンジャーの研修を受け、晴れてボランティア・レンジャーの仲間入りができました。

3年前、新聞でボランティア・レンジャーの存在を知り、昨年より申し込みを続け、今年やっと希望がかないました。

私は、趣味として登山やキャンプ等をしています。特に自然にふれるのが好きで、子供を連れての森林通り、花を見たり、木の実を拾ったり、虫を採ったりしている日々を送っています。子供が木や虫に興味を持ち、子供と共に図鑑を見る事が多くあり、子供より親のほうが勉強させられることが多いです。

今回、研修木や動物についていろいろ学ばせて頂き、今までの名前を覚えるだけの山登りや森林通りでなく、森林全体を見て、動植物の働きや森林の成立ちを学ぶ大切さを知りました。

ただ漠然と自然を見ていた今までとは違い、色々の角度から自然を見るように心がけている毎日です。

研修を終えて、早々自己研鑽をと考えましたが、色々な雑用でなかなか自己研鑽に励めずにいましたが、9月の後半からやっと、自分のフィールドと決めた、野幌森林公園や恵庭の国有林や防風林、それに郷土資料館や国設滝野すずらん丘陵公園主催の木の実ウォッチングに出掛けたりしています。そこでは野生生物情報センターの人達の自然解説の素晴らしさに感心するばかりです。

そうして野生生物情報センターのウォッチングガイドと呪めっこで、次ぎの自己研鑽の計画をたてています。

まだまだ自己研鑽が足りない私ですが、登山で見に付けた知識等、自分の出来るボランティア・レンジャーの活動があれば積極的に参加していきたいと思ひます。

これから、皆さんよろしくお願ひいたします。



〒061-13 恵庭市恵み野東5丁目3番1

☎ 0123-36-3944

貴重な紙面に自己紹介の機会をいただきました、札幌の会社員兼ニセコ週末悠遊町民?で、3年9月真狩の研修会振出し、名ばかりのボラレンです。よろしく願い申し上げます。

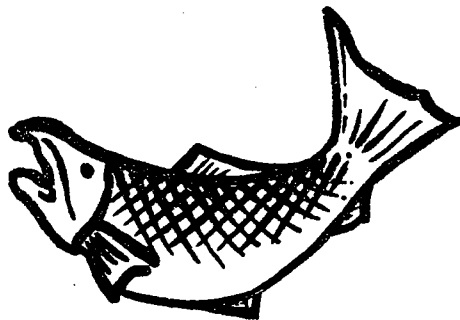
第二の人生を迎えて、いささかなりとも心に余裕をもって自然を眺めると、新緑の美しさ紅葉のすばらしさに改めてびっくり。ニセコに草庵を結んだからには、せめて羊蹄、ニセコの自然くらいは知りたいと思ったとき、ボラレンの研修会が目につき、内容も知らないまま申し込みました。

第一の人生で、大都会と田舎の両極端の暮らしを味わった。その結果、都会も田舎も捨てがたく、最終の勤務地羊蹄山麓に魅せられて、ニセコ有島を二つ目の居住地とし、昨年から中山峠を越えて週末の通い町民となった。

ニセコでは、土づくりから花や野菜を植え始め、友達が来れば山を歩き温泉をめぐり、雪が来ればスキー、融けたらジョキングを楽しんでいる。ニセコを語るとなれば、有島文学と自然だ。前者は本を開けると、明治、大正の時代にひたり想いをめぐらす。後者は、誰かに教わらないとなかなか学ぶことはむずかしい。

研修を受けてみて、自然と言っても範囲が広くて、どこから入ったらいいのか。動かないものは観察し易いのはと思って、植物から、図鑑とにらめっこ。通勤途上の木々をみては、おお ツリバナが、テウチグルミがこんなところになどと、びっくりしながら発見を楽しんでいます。

ひと様のお役に立てるようになるのは大変と思いますが、早くニセコのご案内をしたい、と言うのが望みです。先輩の皆様のご指導をよろしくお願い致します。



嗚呼、野幌自然観察の集い

札幌市 峯村 道代

9月8日(日) 天気 快晴

本日は私の“ボランティア・レンジャー”としての記念すべき初舞台の日。思えばこの日まで苦勞らしい苦勞など何もせず、研修会の時も人の後ろについて回り、その後も図鑑を購入するでもなく、進んで野幌の森に出向くでもなく、生活に明け暮れていた日々。

だのに気が付けば自然解説員？嗚呼、勘弁して下さい。

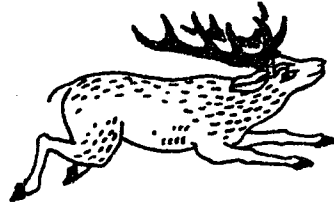
一週間前に下見をしたとはいえ、相手は何を聞いてくるかわからない。もはや私にできる事はただ一つ。

「樹と友達になりましょう」

「名前？はい、図鑑で調べてね」

図鑑は買った。

虫刺されの薬も持った。



さて、本番。

一般参加97名。レンジャー13名。家族連れ多し。

幸い、他の優秀なレンジャーの方と一緒に歩く事になり、解説はお任せして、私は雑用と子供の相手にまわらせていただく。年配の方や親御さんは解説に耳を傾けて下さるが、子供だとそうもいかない。お目当ては、どんぐり、きのこ、栗。

栗のイガむきを手伝い、きのこはとっちゃいけないと注意をし、ゲームと一緒にする。あの子たちは森の中って楽しいと思ってくれたらうか。

考える事しばし。

魚や野菜の名前ならばわかるのに、樹木や草だと名前を知らないのは何故？ 街路樹のナナカマドやイチヨウならわかる。桜や梅もわかる。でも他の森の樹はさっぱり。

明解。生活に根差していないから。

木を使って何かするという事をしていないから。

本当はとてつもなくお世話になっているのに、身近に感じられないのは、ちょっと寂しい。

せめて食べられる草、薬草、薬木ぐらい覚えて、生活に役立てたいものだと思うこの頃です。

雑草も仲間

旭川市神楽3条6丁目

吉田 政徳

このたび、北海道ボランティア・レンジャー協議会に入会いたしました。自然を通し、皆様のお仲間入りをさせていただきましたことを嬉しく思います。

大雪山の頂きが白い衣に替わり、野鳥や動物たちも、これから迎える冬に備えて大忙しそうです。四季折々にいろいろな姿を見せてくれた雑草も、越冬の準備に入りました。

一般に雑草は派手さはありませんが、よく見ますとそれぞれが個性をもち、味わい深いものばかりです。それに、よく考えてみますと、これらの雑草は、いずれも私たちと深いかかわりをもっていることに気づきました。雑草は一般にじゃまもののように扱われますが、いろいろな個性をもった集まりである人間社会と同じだなあとつくづく思います。

毎年、学校ではグラウンドの除草を行います。雑草は絶え間なく生えてきます。おそらく、この雑草の根や種が土の中で、次の出番を待っているからでしょう。しかし、グラウンドの表面の土が吹き飛ばされずに保たれているのは、この雑草のおかげかもしれません。実に人間と深いかかわりを持っています。

雑草も一つの環境であり、私たちの心に深く働きかけ、感動を呼び起こすことが期待される教材であり、偉大な教師でもあります。今後はその価値が一層見直されていくことでしょう。

雑草にも命があり、自然の中で、あるいは人間とのかかわりの中で、生きる立場にある雑草に温かい理解をもち、自然のもつ教育力を精一杯に活用していきたいと思えます。

今後とも、よろしくご指導のほどをお願いいたします。



一 秋の森林観察会の時、 ふと考えたこと一



札幌市南区 瀧谷尚弘

平成3年10月20日朝、時期としては珍しく遅い台風のニュースを聞きながら、野幌の空の方を眺めていました。

「秋の空」は、変わりやすいもののたとえに使われていますが、去年は雨で中止でしたから今日の自然観察会は、大丈夫かと雲行きを見て実のところ内心は心配していました。しかし、現地に行き観察会の参加者を見たたんそんな杞憂は一掃されました。

百人を越す参加者は、カツラの葉の香る中、およそ6kmのコースを若干の雨も気にせず野幌の深まり行く秋を、空気、紅・黄葉、木の実、草の実、キノコなどを通し、感じとることができたと思います。

道立林業試験場の職員による森林調査のアンケートもあり、スケジュールとしては距離的にも時間的にもかなりハードであったように思います。

さて、参加者は大学職員、大学生、ガールスカウト、夫婦など多彩であり札幌近隣の、江別、千歳、小樽、石狩や広島などから集まっておりました。さらに沖縄から来た家族も参加しておりました。

この秋の森林観察会を通して、人と自然のふれあいを私も楽しませて頂きました。今回、レンジャーが10人と森林公園の職員が参加したのですが、もっと多くの仲間が全道にいて、それぞれのフィールドで様々な活躍をしているものと思われます。

ところで、21世紀まであと何年残っているのでしょうか。今年はフィリピンで台風により6,000人もの死者を出したのをはじめ、中国などでも洪水の被害が目立っております。なぜ、こんなに被害が大きかったのかと申しますと、森林の伐採により鉄砲水が発生したからだそうです。

生態系を無視した乱開発が、地球のバランスを壊し、破局的な大災害を多発させているとも言われております。振り返って、日本をみると現況は一体どんなもののでしょうか。日本はおおよそ70%が森林といわれておりますが、林業の衰退やリゾート開発などで近年、急激に減少しているようです。(芝生などによる緑地は増えているようですが)ヨーロッパ、例えばドイツは森林率は30%くらいといわれています。

しかし、こういう数字にはちょっとしたからくりがありまして、実はヨー

ロッパの森林は17世紀末には乱伐、放牧、火入れにより、絶滅寸前にまでなったそうです。それが国民的事業として、200年ほど前から森林づくりが懸命に行なわれ、ようやく今日までの水準に回復させたのです。そして日本では50年で成長しきる木がドイツでは実に150年もかかるそうです。

つまり日本がいかに自然に恵まれているか、逆にドイツ国民が如何に勤勉に森林づくりを行なっているか、ということをごここで一言述べたいのです。

その上で、酸性雨の被害は、ドイツでも深刻になっています。

一方、日本では人の手を加えない自然そのままの森林がいいのだ。という考えが根強く残っており、誰でもふだん着のまま入って楽しめる森林はそれほど多くはありません。しかし、札幌近郊では野幌森林公園や円山、藻岩など身近なフィールドがあり、自然観察者としての眼を養い、広げていきたいものです。

毎年、年末にはベートーヴェンの第九交響曲の合唱が放送されますが、あの歌の中では、森林を含めた大自然と人間との調和から生れる喜びを歌っているのだという人もおります。

そして街路樹一つとっても街がまるで森の中にあるような欧米の都市に比べると、日本そして北海道の街は、まだまだ貧弱な感じがします。それでもようやく地域の自然と文化を反映した本格的な並木、エルムとかシナノキ、イタヤカエデ、アオダモなど、もともとあった木に目が向けられる兆しが現れてきました。それは、自然観察会に参加する人達からも伺い知ることができます。野幌森林公園やほかの場所で何度かお目にかかる顔ぶれは、自然の仕組みや生き物の暮らしぶり、人と自然の繋がりを観察したい、という意欲に溢れています。

従いまして私共も、ボランティアとして、こうした人々と一緒になって自然に親しみ、フィールド・マナーを守り、これからも安全に注意して自然観察を続けたいと思います。そして、多くのレンジャーの方々とも、共有財産である自然に親しむ機会を出来るだけ多く持ちたいと心から願っています。

自然が豊かといわれる北海道ですが、身の回りの緑は以外に少ないのが現実だそうです。そうであれば、さらなる意欲をもってフィールドや観察のテーマをどんどん広げていこうではありませんか。そして、それらはきちんと整理されることにより貴重な資料となるのです。

一例としてごく普通に見られるカラスやトビでさえ、その生態や生活史は意外に知られていないのが事実なのですから。

千古園のブナ

江別市 須賀盛典

恒例の野幌森林公園事務所主催の秋の森林観察会も、10月20日に行なわれました。我々ボランティア・レンジャーの仲間も参加し、好評のうちに終わりました。

雲の間から洩れる秋の陽光に映えたヤマモミジ・ハウチワカエデ・カツラ等の紅葉（黄葉）が一段と冴え、いまだにその時の印象が思い出されます。

この森林公園の東側に道立野幌運動公園が隣接されています。この入口（道道江別恵庭線）より約300m程江別市寄りに、千古園があります。

このあたりは、民間の開拓団体である北越殖民社の人達が明治23年に入植し、開拓した処です。千古園はこの北越殖民社の中心人物であった関矢孫左衛門翁の屋敷跡で、昭和32年に江別市の公園として整備され、昭和46年には、江別市指定文化財第一号に指定され史跡として保存されています。

この付近一帯は、関矢孫左衛門翁の手記によると、「樹木沢密にして天を見ず」とあり、野幌森林公園の原始林が続いていた模様です。千古園には、推定樹齢170年のキタコブシ、同じく推定樹齢170年で樹高18m、直径110cmのミズナラなど大きな樹木が随所に見られます。

これらの大樹に混じって、ブナの本がおよそ30本程見られます。開拓当時に植えられたものかもしれませんが、いずれも大きく成長し、なかには推定樹齢110年、樹高25cm、直径63cmの見事な大樹があります。一年を通じその四季折々の素晴らしい姿を見ることができます。側に立つと圧倒される思いもしますが、開拓当時の人達と対話しているような親近感も覚えます。

ブナの自然林は、北海道南部の黒松内低地帯が北限とされ、これより北の地域では自然林としては存在しないと言われています。

千古園のブナは、望郷の想いもあって、この地に植えられたものと思いますが、大事に育てられ、可愛いがられて今日の大樹に成長したわけですが、これら大樹を見るにつけ、当時の人達の自然に対する心意気が伝わって来ます。

また、野幌森林公園が現在も原始林として守られて来た陰には、この地区に入植した人達の並々ならぬ努力があったと聞いています。

氷河時代に繁茂したグイマツが北海道から姿を消したのは、気候が回復した縄文時代の約8000年前と推定されています。

第3回ボランティア・レンジャー実践セミナー
に参加して



岩見沢市 山口慶彦

11月15日・16日の2日間苫小牧市ウトナイレイクホテルを会場に、全道各地から33名のレンジャーが集まった。

第1日目は、山岸先生の「アイヌ民族の医療と薬用植物」をテーマにした講義と野外実習から始まり、アイヌ民族が、いつ頃北海道に住むようになり、その文化がどのように伝えられたか。それを北方圏との繋がりから話された。

その講義の一部を紹介しよう。アイヌ民族は、病気は次ぎの5つの原因によって起こると考えていた。

1) 神罰が下った。2) 祖先の応報による。3) 悪霊による。4) 嫉妬による呪い。5) 腸の虫による。特に5)は、寄生虫のさなだ虫がヤマベ・サケに寄生していて、人体に感染することをアイヌの人達は心配していた。

現在、我々は簡単にこれらをさしみで食べているが、その危険性を先生は訴えておられた。

薬草については、外科的、内科的利用法を、それぞれの薬用植物ごとに説明があった。

野外実習では、それぞれの薬用植物を手に取り細かく説明され、参加者一同感銘した。

次ぎに、ネイチャーセンターで大畑先生から、『人と自然とを繋ぎ併せる「自然解説」計画』が施設計画に先立って立案されなければならない。と「自然解説」を主体とした環境教育の在り方などについて説明があった。

今回、ウトナイ湖がラムサール条約に指定されたことについても触れられた。

夕食は懇親会に併せ、夜8時過ぎまで賑やかに行なわれ、後はそれぞれの部屋で地域の観察会などについて話し合ったが、「私達道央に位置する者は、もっとリーダーシップを持って先頭に立たなければならない。」と痛感した。

第2日目は、午前6時半より大畑先生と村井先生による野鳥の観察会が行なわれ、観察のポイントについて説明があった。例えばオオハクチョウの廻

りにコガモが纏りついている様子を見て、「これは水深と関係があり、深いとコガモの首が届かないが、オオハクチョウは届いて採るので、そのおこぼれを頂戴している風景です。」「オナガガモは、人間が行くと側に寄って来て餌をねだるから、イギリスでは乞食ガモと言っています。」等々大変面白く聞くことが出来た。

朝食後は小川先生による「自然観察会における企画立案」をテーマに、講義と実習が行なわれた。

インサイド（内部要因） 1）能力。2）経験。3）知識。

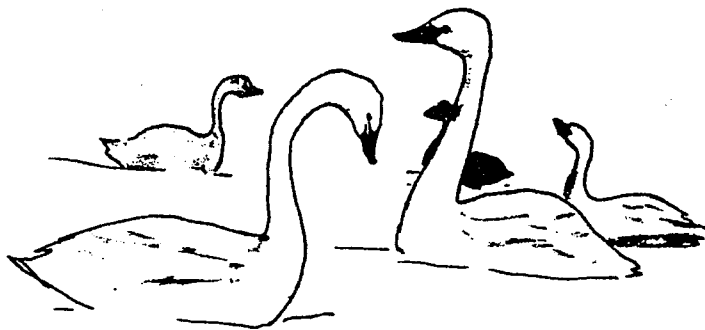
アウトサイド（外部要因） 1）フィールドの環境と季節。2）参加者の質と人数。3）所要時間。このうち、

解説者は内部要因にとらわれがちであるが、むしろ外部要因の方が大切ではないか。と、実例をあげながら説明された。

実習では、6人1班でテーマが与えられる。それについて、各班ごとに企画立案をし、発表する。それを小川先生が講評・指導・助言する形で、今後の観察会に即、実践出来るような実習内容であった。

2日間にわたり種々の勉強が出来たことに、講師の先生と主催者である道自然保護課の皆様に厚く御礼申し上げたい。

感想としては、私のような老人には大変ハードであったように思うが、入ってしまうと熱気がこもって、そのハードさを忘れてしまい、終了してから家路につくのがしんどかった。



『道民の森』 秋の観察会 に参加して

平成3年10月13日(日)

札幌市 中川 親善

1. 下見で アワヤ熊が・・・

自然観察会に先駆けて急ぎよ下見をするとの連絡があって、本番一週間前の10月5日朝早くに出かけることとなつた。70kmの道程は中秋の紅葉とドライバー佐々木さんの巧みな話術に乗って距離を感じさせない。道民の森は朝靄のなか、まだ眠りの中のようなようだ。総合案内所前の駐車場には森の関係者の車が三台ほど止まっているのみだ。その隣に車を停めて車外に立った佐々木さんが『このドロは何だ、クマの足跡ではないか』呟くような重い言葉に瞬間殺気立った空気が走る。同乗の三名の顔もギグッとこわばつた。何人かの人の現場検証が始まっている。

見るほどに、左手の山裾から親子連れとおぼしきクマ君の足跡が続いている。指紋?も湯気が立つほどの新鮮模様だ。案内所の人のお話では今朝方早くのものという。とすれば、まだ遠くへは去っていないはず、森の近くに居るのかも知れない。そんな思いが足を凍らせる。観察会も命がけといったところである。



2. 観察会寸描

10月13日(日)。観察会日よりの快晴。参加者40人 ほとんどが札幌からの家族連れや夫婦での参加である。午前は住友順子さんの室内レクチャー『木の実、草の種子の運ばれ方』の快調な説明が参加者を魅了する。

午後はいよいよ観察会である。Aコースを2時間の予定、5グループに別れてボラ・レン大友副会長以下7名が森の案内人となる。

コースの入り口では、ヤチダモ、ニガキが歓迎しているようだ。丈高なシナノキにからむツルアジサイの花の名残り、その下にはツタウルシノ3出複葉の紅葉が美しい。ハウチハカエデは樹によっても、枝によっても彩りが違う。足下にはコウゾリナ、ハチジヨウナ、タンポポモドキ、ヒメジ

ヨオン、ノギク、エゾノコンギク、ユーゼンギク、サワヒヨドリ、イヌタデなどの小さな花が一面にシーズンの終焉を咲き飾っている。

両側には植栽されたセイヨウノコギリソウの白い小花が乱れ咲いている。フトこの先何年かたつたときのノコギリソウの群生が浮かんでくる。森に植生されたこれらの草花たちが自分の生きる力を振り絞っての戦いがこれからもツウーッと続くのであろう。果たしてどんな花地図となって残っていることやら???

森を歩いて行くほどにシナノキの多いのが目につく。ほとんどの実が独特のウイングを付けて来世を夢見ているようだ。

池を過ぎて3mほど昇ったところに見事なキハダが見える。この樹皮には得も言われぬ風格を感ずるのはどうしてなのだろうか。また、黒く熟した果実を見ていると、遠くアイヌの人びとがこの樹と共に生き助けあつて来たということが思い出される。黒い実をひとつ二つ舌に載せて味を確かめる。ミカン科の味よりもニガミが先に走る。内皮(黄柏)は5gほどを煎じて服用すると健胃整腸剤としての効用も高いという。

しばらく歩みを進めるとコシアブラが見えてくる。5葉が掌状複葉となつて、見事なまでに透化した淡い黄白色は、なんとも言えないキレイさがただよっている。コシアブラの葉を、午後の木漏れ日を背にして見上げるとき、その美しい自然が繰り広げるドラマに身体ごとが吸い込まれるようになる。

快い汗を肌を感じながらの自然とのふれあい、自然の偉大な仕組みやロマンのあれこれを、目で眺め手で確かめながらの秋の観察会は、全員が大きな満足感を抱いてそれぞれの家路に向かつたことであろう。

お昼すぎデイキャンプ場から立ち登っていた焼き肉の香煙も消えかかり幼子たちが遊ぶ声が流れてくる。

道民の森には、多くの人が森と親しみ、森を知り、その恵みを受けつつ自然と共に生きる喜びや、自然と共に生きるやさしい心を培う大きなテーマがあります。次回この森を訪れるときには、森はまた新しいドラマを演じてくれることだろう。どんなドラマか早く見たいものである。



『しんぶん』をよんで

札幌市 田中利男

「人間に狩られて死んでいった多くの動物に代って、そのハンターたちを殺してやりたいほど憎しみを覚えました」。十勝管内芽室町の保母A子さん（42）からの手紙が北海道新聞社会部に届いた。

エゾシカ猟が解禁されたばかりの16日、同管内鹿追町で密猟の逮捕者が出た。上士幌町でも違法な猟が確認されるなど、ハンターの無法が目立つ。それを報じた19日朝刊北海道新聞帯広版を讀んでの手紙だ。

仕事で2～3歳の幼児と接するAさんは子供からよく聞かれる。「クマはおっかないんだよね」「トラは悪いんだよね」とー。

「そのたび『人間ほど悪くて恐ろしい者はいないよ』と答えます」「『クマやトラは鉄砲もナイフも作れない。人間は鉄砲やナイフ作って殺していくんだ』と答えながら、人間のおごりに泣きたい気持ちになります」とA子さん。

道東の観光地で見たアライグマの小屋の「野生で凶暴なのでエサを与えないで」という看板のことも挙げ、人間の身勝手さを怒る。

手紙は「本道の自然はリゾート開発の真ただ中にありますが、動物と人間の共存が、だれもが考えるべき問題であることの訴えでもあった。

1991年11月26日（火曜日）の北海道新聞夕刊 ◇ まど ◇ 欄にのった記事である。Aさんとは記事の仮りの名前であるが、このような優しく強い人達が100人1000人と増えても、やはりほかの生き物を楽しげに殺しアハハと笑う人間は絶えないのだろうか。必要あるとき心を痛めながら、生き物に対するハンターを育てることが急務など考える現代の情けなさを感じる。

自然動物が多くいた時代のアイヌ民族が神に感謝しながら、畏敬の心をもつての狩猟、あの心こそいまのハンターの一人びとりに考えてほしいのです。人間そのものも自然の中の動物であり、多の生き物と同じ仲間であるという事を忘れていけません。

人間は道具を作る事を知りました。それだけで他の仲間より優位になったわけです。そのことが進歩して人間には出来ない事がないとの大変な思い上

がりをつくってしまいました。

畑を荒す動物、苦勞した人間は怒ります。「動物を保護するなんて、とんでもない。……………なにを言っているんだ」とコブシを上げる。

ものを作る、考えられる人間。地球を支配すると言う人間。地球上に必要なのないものは無かった筈です。

この記事を通じ、自然のなかで私たちが生かされている。と言うことを想いおこす橋渡しになれば望外の喜びです。

◆ 無念の動物を偲びて。 A子さん有り難う。

1991. 12 来る年に陽を

お 知 ら せ

今冬から来春にかけて私どもの協議会が自然観察会に協力しております、北海道野幌森林公園事務所主催の自然観察会は下記のとおりです。
一般参加者への案内や、自分自身の勉強に是非参加してみませんか。

◎ 四季の森林観察会

◇ 冬の森林観察会 平成4年3月 1日(日) 9:30~14:00

「3月の森は、まだ白一色ですが膨らみかけた木の芽や小鳥たちのさえずりの練習などに、春の息吹を感じてみませんか。」

★ 集合場所や観察コースなどは、1ヵ月前までに公園事務所が決定します。

☆ ボランティア・レンジャーは、この1週間前くらいに下見をし、また、当日も9:00までに集合します。

◎ 月例観察会

◇ 1月の月例観察会 平成4年1月 9日(木) 10:00~12:00

「白銀の森でも、動物たちは餌を求めて活発に活動しています。雪上に残された足跡などから、その生活の一端がうかがわれます。」

◇ 2月の月例観察会 平成4年2月13日(木) 10:00~12:00

「すっかり葉を落とした森では、遠目にも樹形がよく分かります。また、樹木の冬芽の観察もこの時期の楽しみです。」

★ 北海道開拓記念館前広場集合で、記念館周辺を散策します。

※ 本文は平成3年度野幌森林公園事務所の森林観察会パンフレットから転記し一部補足したものです。

◎ 新会員の皆さんへ

ご縁があつて当協議会に加入された皆さん。前から会員である私たちは心から皆さんを歓迎します。

第18号を送りました時、協議会に加入された皆さんには自己紹介を兼ねボランティア・レンジャーや自然に係わる感想について投稿くださるようお願いしました。

今回の第19号はその投稿・紹介、感想文を主体に出来たらと思い発行を若干遅らせました。

掲載した分につきましては、改めてお礼を申し上げます。風聞ですが「皆が一度に原稿を出すと、編集する側がその整理に困るのではないか。」と心優しく、ちゅうちょされているとか。

もし、そのようでしたら心配ご無用です。

この年末から年始にかけ、次回第20号の原稿がうず高く積まれ、その整理にてんてこ舞いをしてみたいものです。

「第3回ボランティア・レンジャー実践セミナーに参加して」岩見沢市山口慶彦さんの中にあつた、ある講師のお話しに「野外ガイドを実践しようとする際、インサイド（内部要因）にとらはれがちだが、むしろアウトサイド（外的要因）が大切だ。」ということは、この投稿のことについても一脈通じるのではないだろうか。と思っています。

いずれにしても、当面、この会報が会員皆んなの情報交換やきずなを強くする場です。

原稿締切日にとらわれず、また、文章の長・短を問わずですから、どんどん投稿してください。まさに「あなたが主人」「あなたが中心」です。

さし当り、某所から極秘に入手しました資料を次ぎのように掲載しますので今後の活動の参考になれば幸いです。



(広 報 部 佐々木 幸 夫)

回数	氏名	現住所と電話番号	興味を持っている・解説を担当したいもの
1	吉田 真紀子	〒061-14 札幌市東区南11条5丁目3番5号 ☎0123-	観。
3	佐々木 文雄	〒085 釧路市春緑6丁目2-2 ☎0154-41-5750	歴史、歴史、産業。
5	竹内 英子	〒004 札幌市厚別区もみぎ台南1丁目11-2 ☎011-897-6464	植物、鳥類。
6	峯村 道代	〒004 札幌市厚別区厚別東4条2丁目2-31 A-8 ☎011-897-2335	植物、動物、天体、星座。
7	香島 満也	〒003 札幌市白石区本郷通13丁目南2-24 ☎011-865-8928	歴史。
8	野呂 一夫	〒095 士別市中土町7線東3 ☎01652-	植物、植物。
"	野長岡 宏幸	〒077 留萌市大町2丁目7 ☎01644-	鳥類。
"	長森 敏光	〒077 留萌市大町2丁目7 ☎01644-	植物、植物、鳥類。
"	森田 敏光	〒064 札幌市中央区南7条西23丁目2-10 ☎011-513-9575	植物、植物、鳥類、歴史、産業。
"	吉田 政徳	〒070 旭川市神楽3条6丁目 ☎0166-	植物、植物、哺乳類、鳥類、昆虫、地質。
"	佐野 亮二	〒099-02 紋別郡大滝町金山 ☎01584-	植物、植物、昆虫。
"	菅原 晃	〒099-02 紋別郡大滝町水谷 ☎01584-	植物、植物、昆虫。
"	菅原 正義	〒073-01 砂川市麓山55 ☎01255-	鳥類、歴史、産業。
"	大吉 水勲	〒098-16 紋別郡興和町字津 ☎01588-	地質、歴史。
"	小坂 法典	〒099-01 紋別郡白滝村東区 ☎01584-	植物、植物。
9	井 郁夫	〒077 留萌市神見町3丁目259 ☎01644-	植物、植物、鳥類、昆虫。
"	小泉 郁夫	〒005 札幌市南区澄川4条1丁目5-2-216 ☎011-832-1903	植物、植物、歴史、産業。
"	森原 康伸	〒068 岩見沢市北本町東8 ☎	植物、植物、鳥類、昆虫、地質、歴史。
"	田原 弘之	〒061-22 札幌市南区藻野3条9丁目263-36 ☎011-591-8698	植物、植物、地質、歴史。
"	菅原 敦	〒005 札幌市南区北の沢9丁目4-14 ☎011-571-1305	植物、植物、歴史、産業。
"	中田 茂男	〒072 美瑛市南美瑛町南南 ☎	歴史、産業。
"	小林 英世	〒064-13 道庁市東5丁目3-1 ☎0123-	植物、植物、鳥類。
"	箕浦 博	〒081 上川郡新得町字上土橋西3-16 ☎01566-	歴史、産業。
"	池田 郁郎	〒048-14 紋田郡ニセコ町ニセコ482 ☎0136-	植物、植物。
"	栗山 誠	〒063 札幌市西区二十四軒1条6丁目12-13外 ☎ ☎011-613-7540	植物、植物。
"	山本 勇	〒044 紋田郡興和町字北塚大75-65 ☎013-	哺乳類。
10	鈴木 彰	〒067 江別市東支町99-1 ☎011-383-9925	植物、植物、歴史、産業。
"	工藤 栄一	〒073 滝川市幸町1丁目1-30 ☎0125-22-3226	植物、植物。
"	斎藤 一吉	〒005 札幌市南区澄川6条12丁目1-2 ☎011-	植物、植物。
"	田村 允郁	〒065 札幌市東区東苗穂11条2丁目897-2 ☎011-791-0127	地質、歴史。

編集後記

久し振りに映画「七人の侍」を見た。十数年前に見て以来、今回で四回目である。何時見ても一人ひとりの個性の重みに驚く。黒澤監督は敢えてタイトルを — 「SEVEN SAMURAI」 — としてS（複数）を付けなかった。組織は一つであり七つの要素どれ一つ欠いてもこの映画は成り立たない。

—— 個人の役割とは何か？組織とは何か？ —— 何時の時代にもそのことを問いかける作品である。

自然保護活動を考える時もこの哲学が必要に思う。一人ひとりが个性的なにじみ出る色を出しながら、しかも全体の色合いを決して崩さない。

ふと忘れかけていたことを「七人の侍」は思い出させてくれた。

山上 光一



今年も会員の皆様に、ご協力とお力添えをいただき、ありがとうございました。

来年も皆様にとって良い年でありますよう、心からお祈り致します。

—— 北海道ボランティア・レンジャー協議会役員一同 ——